

チャレンジ！岡山県スクールインターネット博

岡山県スクールインターネット博協議会 佐々木 弘記

1. はじめに

平成 14 年の 4 月から 11 月まで、「チャレンジ Web コンテスト 岡山県スクールインターネット博」(以下、コンテスト)を開催した。これは、岡山県内の児童・生徒に呼びかけ、総合的な学習の一環として、「子どもたちによって作り上げられたホームページ」を一堂に集めたサイト(図 1)を展開し、ホームページコンテストを実施するものである。「伝える」をテーマに、小・中・高の 3 部門でのコンテストを通し、子どもたちに情報発信としての「実践の場」、ホームページを介しての「コミュニケーションの場」を創造することにねらいがある。

最終的には、県内 172 校から計 254 作品の応募があった。コンテストの結果発表は、コンベックス岡山で開かれた「全国マルチメディア祭 2002 in おかやま」の最終日 11 月 17 日に行われた。35 作品が最終審査に進み、最優秀の県教育長賞に高梁市立福地(しろち)小学校が輝くなど各受賞作が決定し、それぞれ表彰状や記念品が贈られた。



図 1 コンテストのホームページ

2. コンソーシアムの設立

山陽新聞社・山陽放送の呼びかけにより、平成 14 年 4 月に岡山県小・中・高等学校長会や県教育工学研究協議会などの学校関係団体、及び株式会社ベネッセコーポレーション、株式会社リオスココーポレーション、スカイリンクシステム株式会社、株式会社両備システムズなどの企業から成るコンソーシアム「岡山県スクールインターネット博協議会」(以下、協議会)が結成された。コンテストはこの協議会が主催し、県教育委員会が共催して実現した。まさに学校・企業・行政が一体となってコンテスト開催に挑戦した。

協議会では、1 校でも多くの学校に応募してもらおうと、メールマガジンを配信して情報を流したり、ホームページ制作のワークショップを開いたりとあらゆる手を尽くして広報活動を展開した。作品を作る子どもたちだけでなく、協議会にとってもチャレンジの日々であった。

3. チャレンジ！スクールインターネット博

(1) イメージキャラクター「TAE」

山陽放送の人気アナウンサー西田多江さんがコンテストのイメージキャラクター「TAE」を務め、メディアを用いた広報活動においてコンテストをアピールした。

(2) メールマガジンの配信

県情報教育センターの協力を得て、コンテストの進捗状況や IT 教育の実情などを TAE さんが呼びかける形で配信した。週 2 回の割合で配信し、受信者は県内各学校の情報教育担当の教師を中心に 505 名に及んだ。

(3) 山陽新聞の特集記事

山陽新聞社が 4 つの小・中学校を取材し、6 月に新聞紙面 1 ページを使ってコンテストの紹介をした。また、期間中 6 回にわたり、特集記事でコンテストの様子を紹介した(図 2)。

(4) 山陽放送の特別番組

番組では、コンテストに参加した各学校の取り組みを取材、コンテストの結果が出るまでの様子を 2 回にわたって放映した。1 回目には、ホームページ初チャレンジの学校から、かなり進んだ学校まで幅広く紹介。2 回目には、仕上げ段階に入ったコンテスト直前の各学校の状況と、コンテスト本番の様子を紹介した。

(5) 日本教育工学協会(JAET)の後援

県教育工学研究協議会が所属する JAET の後援を受け、スマートテクノロジー株式会社、ジャストシステム株式会社、スズキ教育ソフト株式会社、(株)内田洋行教育システム事業部、株式会社阿部など更に多くの企業から賞品の提供を得ることができるようになった。それに伴い、コンテストの各賞及び賞品が充実してきた。

(6) ワークショップの開催

県教育工学研究協議会の主催で、教師を対象としたホームページづくりのワークショップを開催した。協賛企業からホームページ作成ソフトの提供があり、参加した教師はそのソフトを用いながら研修した。また、協賛企業が県内の数校を訪問し、児童生徒を対象としたホームページづくりのワークショップも開いた。



図 2 山陽新聞の記事

(7) 教育委員会への依頼

県内の市町村教育委員会や校長会などを訪問し、コンテストへの参加協力をお願いした。県教育長には、山陽放送のラジオ番組に電話出演を依頼し、参加を呼びかけてもらった。またコンテストのホームページには、県教育長からのビデオメッセージも掲載した。

4．応募締切間近に問い合わせ殺到～受付を1週間延期～

9月30日を応募の締切日に設定したが、2学期が始まった段階では、まだ応募数が少ない状態であった。そこで、県教育長名で県内の全学校に応募呼びかけの文書を送付してもらうと同時に、電話による応募依頼をした。その甲斐あってか、締切間近になって電話・FAX・メールによる問い合わせが事務局に殺到した。そこで、締切を1週間延期した。

5．白熱した第一次審査

最終的には、県内172校から計254作品の応募があった。これらの応募作品を6名から成る第一次審査員が最終審査へと進む作品を選んだ。それぞれの賞に応じた評価の観点と規準を設け、思いや願いを「伝える」ことができているかどうか作品の隅々まで目を通して審査をした。ソースコードを確認しながら技術的な観点から、デザインやレイアウトの見やすさ・美しさの観点から、などと多様な視点で白熱した議論を展開した。また、多くの作品を閲覧するのにマウスのクリックが重なり、人差し指が腱鞘炎気味になったり、目をしょぼつかせたりする委員もいた。まさに、体をはっての審査であった。そして、最終審査へ進む32校32作品をノミネートした。

6．感動的な表彰式

インターネット上でのオープン投票の上位3作品と合わせて35作品が最終審査に進んだ。最終審査は、「全国マルチメディア祭2002inおかやま」会場のコンベックス岡山であり、各校代表の児童生徒が特設されたステージに上がり、ホームページを大スクリーンに投影しながら持ち時間1分30秒で作品の内容を紹介した。制作した経過や努力した点を語るもの、掛け合いによってホームページの特長をアピールするものなど、どの代表も工夫をこらしながら制限時間内にうまくまとめようとしていた。中には、制限時間内に収まらず、悔しがる児童もいた。その発表を聞き、6人の最終審査員が「発展性や具体性」「伝えたいこと」「地域とのかかわり」などを基準に、入念に作品を審査した。

その結果、最優秀の県教育長賞に高梁市福地小学校が輝くなど、各受賞作が決定した。福地小学校はホタルが飛び交う豊かな自然環境に恵まれており、そんな地域を見つめ直すことで郷土愛を深めた児童たちの率直な思いがつつられていた。全員でわずか6人の複式学級で学ぶ5・6年生が協力、分担し作り上げたのが「福地かがやきプロジェクト」のホームページである(図3)。掲示板や自己紹介もあり、元気いっぱい学校生活を送る児童の姿が浮かび上がってきた。

また、初めてのホームページ賞・山陽新聞社賞に輝いたのは県立養護学校の生徒が作ったホームページであった。自分の意志で動かすことができるのは頭と肩の一部だけという状態で、頭の動きと息を吹きかけることでパソコンを操作できる装置を駆使して作り上げた作品である。受賞に際しては、その生徒がビデオを通して受賞のメッセージを述べ、会場を訪れた人々の胸を強く打った。

表彰式では、TAEさんのインタビューに各賞の受賞者が喜びの気持ちを語った(図4)。



図3 最優秀賞を受賞した作品

7．成果と今後の課題

初めての開催にもかかわらず、多くの応募を得て、全国に誇るマルチメディア県・岡山県にふさわしいハイレベルなコンテストになった。応募した学校の先生から、「コンテストへの応募が、子どもたちにとってはとても励みになった」との声が数多く寄せられた。コンテストが、各学校の教育活動の充実に寄与するところ大であったと自負している。ねらいの一つとしていた、子どもたちに情報発信としての「実践の場」を創造する上で、コンテストのサイトは大きな役割を果たしたと言える。もう一つのねらいである「コミュニケーションの場」の創造についても、子どもたちが作ったホームページを学校や家庭で閲覧することで、親子あるいは教師と児童生徒との間で新たなコミュニケーションが生まれたものと確信している。今後は更にその取り組みを発展させ、コンテストのホームページを介して、学校間でのコミュニケーションを促すことができるように工夫をしていくことが課題である。

8．おわりに

来年度も引き続き、コンテストを実施する。学校・企業・行政が協力する体制を更に強めながら、前回以上の応募を集め、より優れた作品を表彰していきたい。コンテストを通して各学校の教育活動がますます豊かになっていくことを願っている。



図4 表彰式の様子